

企画「歴史学と哲学の方法論的交差——感情史をめぐって」

哲学史における感情論の研究

その意義と方法をめぐって

笠松 和也

哲学において「感情」を主要な研究テーマとする場合、大きく分けて2通りの手法がありうる。一つは、(A) われわれが日常的に経験する「感情」という事象そのものを分析する手法である。例えば、近年確立しつつある「情動の哲学 (Philosophy of Emotion)」という分野では、心の哲学や認知科学の成果を踏まえた分析が行われている¹。また、現象学からも感情を分析するアプローチが進んでいる²。その一方、もう一つの手法として、(B) 過去の思想家たちが感情について論じたテキストを分析する手法もありうる。実際、アーサー・ラヴジョイ『存在の大いなる連鎖』によって確立された「観念史 (History of Ideas)」においては、個々の感情に注目して、思想・文学・歴史のテキストを横断しながら、その概念的な系譜を探索する試みが見られる³。そして、もちろん哲学史においてもまた、古代から現代に至るまでの思想家たちが展開した感情論の分析が進められている⁴。本報告では、これらのうち哲学史に話題

-
- 1 Cf. Peter Goldie (ed.), *The Oxford Handbook of Philosophy of Emotion*, Oxford/New York: Oxford University Press, 2010; Aaron Ben Ze'ev, Angelika Krebs (eds.), *Philosophy of Emotion*, London: Routledge, 2017; 信原幸弘『情動の哲学入門——価値・道徳・生きる意味』勁草書房、2017年。
 - 2 Cf. Thomas Szanto, Hilge Landweer (eds.), *The Routledge Handbook of Phenomenology of Emotion*, London: Routledge, 2020.
 - 3 Cf. Maryanne Cline Horowitz (ed.), *New Dictionary of the History of Ideas*, 6 vols., Detroit: Charles Scribner, 2005.
 - 4 Cf. Simo Knuuttila, *Emotions in Ancient and Medieval Philosophy*, Oxford/New York: Oxford University Press, 2004; Bernard Besnier, Pierre-François Moreau et Laurence Renault (eds.),

を絞った上で、その中で感情論を扱う意義と方法、そして課題を考えてみたい。

1. 哲学史における感情論研究の意義

哲学史の中で感情論を研究する意義は、おそらく感情のメカニズムそのものを解明することのうちにはない。というのも、哲学史が扱うのは、もっぱら古い時代の哲学者たちの言説であり、その中には当然、現代の科学から見れば、誤謬に満ちた見解が多く見いだされるからである。現代的な思考に通じる何らかのヒントは見いだせるかもしれないが、現代の科学と同じ水準でそのまま利用できる理論を見いだすということはまずありえない。この点が、情動の哲学や現象学における感情研究とは異なっている。

では、「当時の人々の情感性を明らかにする」という歴史的意義に訴えてはどうだろうか。もちろん哲学史はそうした側面もち合わせている。例えば、われわれは、デカルトのエリザベト宛書簡を読むことで、17世紀の人々が人生の何に悩み、何を頼りにしてその悩みを克服しようとしていたのか、その一端を知ることができる。だが、哲学史における感情論研究がもつこうした歴史的意義は、かなり限定的であるように思われる。というのも、当時の人々の情感性を明らかにする史料は、哲学者たちの言説に限らず、文学作品や手記、教会の記録など、他にも無数に存在するからである。それゆえ、「歴史的意義をもつ」という回答は、あえて哲学史の中で感情論を読む意義を示してはいない。

それでは、いったいいかなる意義が考えられるだろうか。その一つの候補といえるのが、「われわれの認識の枠組みを問い直す」という意義である。それは、過去の哲学者たちの感情論を読み解くことを通じて、現代のわれわれの認識が空間的・時間的、あるいは地理的・歴史的に条件づけられたものでしかないことを自覚し、そのように条件づけられた枠組みを超えて思考することに他ならない。例えば、われわれは、17世紀オランダの哲学者であるスピノザの主著『エチカ』の中に、「欲望とは人間の本質そのものである」⁵という定義があることを見いだす。この定義は、一見すると現

Les passions antiques et médiévales, Paris: PUF, 2003; Pierre-François Moreau (ed.), *Les passions à l'âge classique*, Paris: PUF, 2006; 廣川洋一『古代感情論——プラトンからストア派まで』岩波書店、2000年。

5 正確には、「欲望とは、人間の本質に与えられた各々の変状によって、何らかのことをなすように規定されていると捉えられるかぎりにおける人間の本質そのものである」（『エチカ』第3部「諸感情の定義」1）と定義されているが、ここでは説明を単純化するため、修飾句

代のわれわれにとっても直感的に理解可能である。すなわち、物事を論理的に考える理性ではなく、心の内奥にある本能的なエネルギーとしての欲望こそが、人間のあり方を決定づけているのだと、ここでスピノザが述べているように見える。だが、そうした理解は、フロイト以後の世界に生きるわれわれの認識の枠組みに依存している。むしろ17世紀のスピノザの念頭にあったのは、粒子が充滿した空間の中で、粒子どうしが押したり押されたりすることを繰り返すことで、個々の粒子の運動が決定されるというデカルト自然学の世界観である。その世界観を下敷きに、人間の本質が無数にある外的原因から制限されつつも、その本質にしたがって行為をなすように自己を決定づけるという事態が考えられている。この自己を決定づける力こそが、ここでいう「欲望」に他ならない。よって、「心の内奥にある本能的なエネルギーとしての欲望」というイメージをここに持ち込むのは適切ではない。だが、ここでの問題は、単にスピノザのテキストを誤読したことにあるのではない。そうではなく、われわれが物事を理解するあり方が、空間的・時間的に条件づけられてしまっていることにある。そのことを自覚させてくれるのが、古典のテキストである。とりわけ過去の哲学者たちの感情論は、われわれが日常的に親しんでいる感情を扱っているため、認識の枠組みによるずれを浮かび上がらせるには、きわめて有益である。哲学史の中で感情論を扱う意義の一つはここにあるといえる。

2. 感情論研究の方法論的な問題

哲学史において感情論を分析する上での方法論を考える際に、必ず突き当たる問題がいくつかある。そのうち感情論特有の問題としては、(1) 術語、(2) 分類法、(3) 文脈に関わる問題が挙げられる。

(1) 術語

古代以来、感情を論じるにあたっては、「感情」という事象を表す術語として、複数の系統の術語が用いられてきた。

ラテン語	affectus, affectio, passio, animi motus, animi perturbatio, animi commotio
フランス語	passion, émotion, sentiment, affect, affection
英語	passion, emotion, sentiment, feeling, affect, affection
ドイツ語	Leidenschaft, Gefühl, Gemüt, Affekt

を省いて文の基本構造のみを取り出した。

これらは語源的に同じ系統に属するとしても、各言語によって、その言語内の語彙体系に占める位置づけが大きく異なっている。例えば、近世の感情論においては、ラテン語文献では *passio* よりも *affectus* や *affectio* が用いられる場合の方が多いが、フランス語文献では逆に *affect* や *affection* よりも *passion* が用いられる場合の方が多い。これに関して、しばしばデカルト『情念論』で「感情」を表す語として *passion* が選択されたのに対して、スピノザ『エチカ』で *affectus* が選択されたことに、感情と受動性を切り離して考えるという現代的な意義を見いだそうとする論者（アントニオ・ダマシオら）がいるが、これはより慎重に考えなければならない。その理由は三つある。(1)『情念論』のラテン語訳では *passion* というフランス語を訳すにあたり、*passio* とともに *affectus* という訳語も採用されている。(2) デカルト自身がラテン語で『哲学原理』を書いた際には、その第4部で *affectus* という術語を採用している。(3) *affectus* という語自体も、*afficio* の完了分詞に由来するという点で、受動のニュアンスを帯びうる。これらの理由から、ラテン語で書かれた『エチカ』において、*passio* ではなく *affectus* が選択されたことに、ただちに何らかの現代的な意義を見いだそうとするのは危険である。

また、「感情」を表す術語は、同じ言語内であっても時代や地域によって傾向が大きく異なる。例えば、英語文献の場合、ホップズがもっぱら *passion* を用いたのに対して、18世紀の道徳感情論では *sentiment* という語が重要な役割を担う。ところが、現代英米圏の認知科学では、むしろ *emotion* や *feeling*、*affect* がよく使われている。しかしだからといって、こうした術語の変遷が思考のあり方の変化と連動しているとは、即座に結論できない。

このような術語の問題は、もちろん個々の感情についても見られる。例えば、「喜び」を表すラテン語には *laetitia*, *gaudium*, *delectatio*, *voluptas* 等があり、フランス語には *joie*, *plaisir*, *délectation*, *délice* 等がある。

感情論を分析するには、こうした個々の術語の差を、著者ごとに、あるいは著作ごとに一つずつ解明していく必要がある。

(2) 分類法

古代以来の感情論では、諸感情のさまざまな分類法が試みられてきた。その中でも歴史上きわめて大きな影響力をもったのが、ストア派による4分類である。

ストア派の分類によれば、快とは現在手元にある善なる対象に対する感情、苦とは現在手元にある悪なる対象に対する感情、欲望とは現在手元にない将来の善なる対象に対する感情、恐れとは現在手元にない将来の悪なる対象に対する感情である。例え

		時間性	
		現在	未来
対象	善	快 (ήδονή, voluptas)	欲望 (έπιθυμία, libido)
	悪	苦 (λύπη, aegritudo)	恐れ (φόβος, metus)

ば、現に所有している富に対する満足感は「快」に分類され、今はもっていない富をこれから得たいと思う切望は「欲望」に分類される。あるいは、現に冒されている病に対する悲嘆は「苦」に分類され、今は健康だけれどもこれから病にかかるのではないかという焦燥感は「恐れ」に分類される。このように、四つの感情は、対象の善性と時間性という二つの観点から整理されている。そして、これらは「第一にして基本的なもの」とされ、他の諸感情はこれら四つのうちのどれかに属するとされる。

こうした分類法は、キケロを介して、アウグスティヌスやトマス・アキナスにも流れ込んだほか、16世紀には「新ストア主義」と呼ばれるストア主義の復興運動が起り、ストア派の感情論に再び注目が集まる中で、ヨーロッパ全土で広く知られるようになった。その影響は、ピエール・シャロン『知恵について』やデカルト『情念論』にも見て取ることができる。

他方、古代末期から中世にかけては、クヌーティラが示すとおり、ストア派の4分類に影響を受けつつも、それとは異なる諸感情の分類法がいくつか見られる。そこには、ガレノス以来の生理学・解剖学やアヴィセンナを代表とするアラビア哲学の影響も含まれている。

それゆえ、こうした諸感情の分類法を読み解くには、思想史の知見を最大限に活用しなければならない。

(3) 文脈

哲学史の中では、「感情」という事象はさまざまな文脈において論じられる。まず、感情は「よく生きること」という倫理学の主題と関わる。これはとりわけストア派において探究された主題で、魂の病としての感情をいかにして治癒するのかは、感情に左右されない平穏な生に到達する上で重要な要素とされる。16世紀の新ストア主義においても、ユストゥス・リプシウス『恒心について』などで、この主題は反復されることになる。

他方、古代のガレノス由来の伝統においては、生理学・解剖学と感情との関係が論

じられてきた。中でも、四体液説と人間の気質との関係は、食事療法の実践とも結びつき、高い関心の的になっていた。この影響は、ヴェサリウスによりガレノス解剖学が刷新されてもなお、生理学の分野において見られ、デカルト『情念論』やヘンリクス・レヒウス『自然学の諸基礎』もその流れをくんでいる。

さらに、中世から近代にかけて、キリスト教神学においても感情について論じられた。とりわけ17世紀においては、アウグスティヌス主義の下、魂を自己から神へと向け変えるという文脈で、世俗的な感情を抱えている状態から神への愛を享受する状態に移行するとはいかなることであるかが論じられた。

そのほかにも、ホップズ『リヴァイアサン』やスピノザ『政治論』に見られるように、感情を分析することを通して、感情をもった人間たちが構成する国家の基礎を論じる例も見られる。

このように多様な文脈に散りばめられた感情論を分析するには、生理学、解剖学、神学、政治思想史をはじめ、隣接する諸学問の知見を活用する必要がある。

3. 課題

少なくとも古代から近代までの哲学史の中には、「感情論」という独立した分野があるわけではない。われわれが現在「感情論」と呼んでいるのは、さまざまな文脈で論じられてきた感情に関する議論を寄せ集めたものにすぎない。そのため、哲学史の中で感情論の歴史を描こうとすると、どうしても学説誌 (doxography) にとどまってしまう。そのかぎりでは、哲学史における感情論の研究は、歴史叙述に貢献することができない。

また、哲学史において扱われるのは、もっぱら哲学者の言説に含まれている感情の分析である。そこで論じられている感情が実際に社会の中でどのように発露されるのか、社会の中の規範とどう関わっているのか、社会に対してどのように影響を与えているのかは、視野の外に置かれてしまう。しかし、哲学者たちの感情論が、その当時のさまざまな実践、すなわち医学的な実践、宗教的な実践、政治的な実践などと関わっていたことは事実である。それゆえ、哲学史の中だけで感情論を分析することは、そうした事実を見落とすことになりうる。

このような問題を克服するには、哲学と歴史学が協働する必要があるのではないだろうか。少なくとも哲学史が描く感情論の歴史と、歴史学が描く感情の歴史 (感情史) がいかなる交差をすることもなく放置されるのは、好ましくないように思われる。